

幕末における長崎唐通事の体制

許 海 華

The Structure of the Nagasaki Tōtsūji Bureau During the Bakumatsu Period

XU Haihua

The end of the Tokugawa bakufu's control of Nagasaki in 1868 also meant the demise of the Nagasaki Tōtsūji Bureau. As many of the former institution's translators were skilled linguists and experienced in foreign negotiation, they were appointed to positions the Meiji government. This use of members of a group with practical skills in foreign relations since the Edo period provided the government with an immediate offensive corps for the New Japan. To pursue an understanding of the changes that occurred in institutions such as the Nagasaki Translation Bureau requires investigating its structure during the bakumatsu period. In forming an explanation of the Tōtsūji Bureau, this essay therefore draws upon two sources that illuminate the Nagasaki government officials during this time. The structure of the Tōtsūji Bureau during the Genji and Keiō eras, 1864 to 1867 is recreated, and furthermore, the structure of the post-1867 (Keiō 3) reformation through the period immediately after the Meiji Restoration is analysed.

キーワード：幕末 唐通事 体制 分限帳 変容

はじめに

17世紀から19世紀中期にかけて、人・物・情報・文化の交流が盛んに行われていた長崎には「唐通事」という職能集団が存在した。その職掌は、単に通商・外交の現場で通弁翻訳にとどまらず、唐船貿易の裁量から唐人・唐館の管理統制、主に対中国を中心とする外交文書の作成、海外情報の収集などの実務に当たり、換言すれば商務官・外交顧問的性格を有するとされている。¹⁾

慶長8年(1603)に創設された長崎唐通事は、寛永17年(1640)に大・小通事に区分され、続いて承応二年(1653)に稽古通事が増設されることによって、大・小・稽古通事という三階職制を基軸とする本通事(＝狭義の唐通事)の体制が初歩的に成立した。その後、宝暦期(1751～1763)の新役創設や文

1) 中村質「近世の日本華僑——鎖国と華僑社会の変容——」(福岡ユネスコ協会編『九州文化論集2 外来文化と九州』、平凡社、1973年)133-277頁。林陸朗「長崎唐通事の職制と役株」(林陸朗先生還暦記念会編『近世国家の支配構造』、雄山閣、1986年)3-44頁。

政・天保期（1818～1843）の員数膨張に伴い、唐通事の機構が次第に拡大され、職制が分化していく。こうした体制上の変化は、江戸時代前期においては唐船貿易の増加や貿易方式の変革によるものと考えられるが、中期以降は来航唐船の艘数が漸減するにもかかわらず貿易の形勢と逆傾向に拡張したのが「唐通事機構内部における体制内運動」によるものと解釈される²⁾。江戸後期に入って、唐通事は唐船貿易の減退を背景に、組織を維持しながら機能していた。

1868年、徳川幕府の長崎支配が正式に終了した。近世長崎の唐通事が制度上に消失した後、多くの旧唐通事は語学の専門技能や対外交渉の経験を以って明治政府に登用され、近世から蓄積されてきた対外関係に関する実務能力の一部を活用し、近代日本の即戦力となった。

近世から近代にかけて長崎唐通事の変容を解明するために、幕末における唐通事存在形態を検討する必要がある。これまで主に近世史の枠内で行われていた唐通事研究に比べて、近世・近代移行期における唐通事の変容をめぐる検討が未だ初歩的な段階にとどまり、近年唐通事個人経歴を中心とする考察、または通事一家の通史的研究が進んでいるが³⁾、唐通事の体制を中心とする研究は未だ少ない。先行研究には、幕末における唐通事の職制・組織に関して、林陸朗「長崎唐通事の職制と役株」が、最初に『慶応元年 明細分限帳』を利用し、慶応年間の唐通事体制の復元、役株の分析を行っている。添田仁「〈開港場行政〉の形成と長崎」⁴⁾は、近世・近代移行期における外交体制の変化を背景に、長崎唐通事出身者がこの時期の開港場行政機関にいかなる形で編入され、どんな役割を果たしたかに言及している。

そこで、本稿は先行研究を踏まえながら、史料の検討も含め幕末明治期における長崎唐通事の変容の視角から、幕末における長崎唐通事の体制を考察し、近世から近代にかけて唐通事の歴史的形態を明らかにしたい。

一、幕末の「分限帳」にみる元治、慶応年間の唐通事体制

1、幕末唐通事体制を記録する分限帳資料

これまでの長崎唐通事研究は、ほとんど近世史の枠内で行われ、『訳司統譜』の記録下限に終止して、文久元年（1861）十月以降の唐通事に関しては看過されてきた。『訳司統譜』の記録が終了して以降の唐通事の動静については、1986年林陸朗が『慶応元年 明細分限帳』を使って、慶応元年（1865）時点で唐通事の具体的な職制とその役株を分析したことから幕末における唐通事研究が進められた。

そこで本稿は、先行研究に導かれ幕末の長崎地役人の全体記録である分限帳に関する二種類の記録から唐通事の関係記録を抽出した。『訳司統譜』などの史料も合わせ元治、慶応年間（1864～1867）の唐通事体制を考察する。⁵⁾

2) 前掲林陸朗論文、21頁。

3) 平井洋『維新への嚮標——通詞平井希昌の生涯』（新人物往来社、1997年）、六角恒広「潁川重寛——唐通事から漢語教師へ」（『漢語師家伝』、東方書店、1999年、1-48頁）、林陸朗『長崎唐通事——大通事林道栄とその周辺——』（初版）吉川弘文館、2000年／〔増補版〕長崎文献社、2010年）。

4) 大阪歴史学会、『ヒストリア』第218号、2009年12月、162-194頁。

5) 宮田安『長崎唐通事論考』（長崎文献社、1979年）は大量の墓碑銘・寺社記録・唐通事家系譜資料から文久以降明治

①元治元年 慶応三年改 諸役人分限帳⁶⁾

「元治元年 慶応三年改 諸役人分限帳」は写本、全一冊である。表紙に「元治元子年 慶応三卯年改 諸役人分限帳 薬師寺」とある。本体は元治元年（1864）に作成された横帳に、慶応3年（1867）記入の部分が貼り紙として貼付された状態になっている。⁷⁾

唐通事の関係記録については、唐方諸立合大通事、唐通事目附・同助、唐大通事・同過人、唐小通事・同過人・同助、唐小通事並、唐小通事末席、唐稽古通事・同見習、唐年行司・同格見習、唐内通事小頭筆頭・同小頭の9段階別になっており、内容は基本的に在任通事の職名、姓名、役料が記録されている。

②慶応元年 明細分限帳⁸⁾

長崎市立博物館所蔵の写本「慶応元年調査 明細分限帳」⁹⁾を原本として、1985年に長崎歴史文化協会叢書の第一巻として翻刻された。

唐通事の記録はその第四巻に収められている。「元治元年 慶応三年改 諸役人分限帳」と同じく、唐方諸立合大通事、唐通事目附・同助、唐大通事・同過人、唐小通事・同過人・同助、小通事並、小通事末席、唐稽古通事・同見習、唐年行司・同格見習、唐内通事小頭筆頭・同小頭の9段に記されている。

内容は唐通事の役株の創設年次・代数・経年数、唐通事本人の職歴と勤続年数、そして役料、年齢からなり、特にほかの分限帳には見られない役株、職歴についての記述が詳しいことが特色である。最初にこの分限帳を唐通事研究に使った林陸朗が、役株の記述を『明細分限帳』とは無関係に考証された宮田安氏の家系復元の結論などを比較した結果、「大部分は合致するのであって、かなり信頼度の高いといふべき」¹⁰⁾と指摘したように、文献的価値が高い。

以上二種の分限帳から、元治元年、慶応元年、慶応3年の唐通事記録を整理して表示したのが下記の表一である。

表一

役職	元治元年（1864）	慶応元年（1865）	慶応3年（1867）
唐方諸立合大通事	額 川 豊 十 郎	額 川 豊 十 郎	額 川 豊 十 郎
唐通事目附定直組立合兼	薛 眞 右 衛 門	薛 眞 右 衛 門	薛 眞 右 衛 門
唐通事目附助定直組立合兼	額 川 彦 五 郎	額 川 彦 五 郎	額 川 彦 五 郎
唐大通事	何 憐 三	何 憐 三	何 憐 三 ¹¹⁾
	李 平 三	李 平 三	李 平 三

初期までの唐通事の家系を整理してきた。本論文もこの研究によるところがおおい。

6) 九州大学記録資料館松本文庫所蔵、資料番号：375。

7) 筆者が記録内容と紙面の虫喰いで確認したかぎりでは、慶応三年記入とされる頁が左右入れ替わって貼り付けられたことがある。

8) 長崎歴史文化協会叢書第1巻『慶応元年 明細分限帳』、1985年。

9) 越中哲也「解題 長崎分限帳」（『慶応元年 明細分限帳』、227-228頁）を参照。

10) 林陸朗「長崎唐通事の職制と役株」、29頁。

11) 『訳司統譜』（額川君平、1897年）に「何隣三」とある。

	中山 太平 治	中山 太平 治	中山 太平 治
	呉 泰 蔵	呉 泰 蔵	呉 碩 三 郎
唐大通事過人	呉 碩 三 郎	呉 碩 三 郎	周 恒 十 郎
唐小通事	周 恒 十 郎	周 恒 十 郎	石 崎 次 郎 太
	石 崎 次 郎 太	石 崎 次 郎 太	東 海 哲 次 郎
	東 海 哲 次 郎	東 海 哲 次 郎	鄭 右 十 郎
	清 河 磯 次 郎	清 河 磯 次 郎	
唐小通事過人	鄭 右 十 郎	鄭 右 十 郎	蔡 善 助
	穎 川 保 三 郎	穎 川 保 三 郎	穎 川 保 三 郎
	蔡 善 助	蔡 善 助	彭 城 大 次 郎
	游 龍 彦 次 郎	[唐小通事] 游 龍 彦 次 郎 ¹²⁾	游 龍 彦 次 郎
	吉 嶋 栄 之 助	吉 嶋 栄 之 助	平 野 栄 三 郎
	彭 城 大 次 郎	彭 城 大 次 郎	穎 川 仁 兵 衛
	平 野 栄 三 郎	平 野 栄 三 郎	
唐小通事助	穎 川 仁 兵 衛	中 山 玄 三	中 山 玄 三
	中 山 玄 三	穎 川 仁 兵 衛	呉 忠 三 郎
	李 忠 次 郎	李 忠 次 郎	神 代 時 次
	高 尾 泰 次 郎		鉅 鹿 太 作
			林 道 三 郎
			穎 川 熊 三 郎
			高 尾 泰 次 郎
唐小通事並			陽 其 二
	陸 市 十 郎	神 代 時 次	穎 川 駒 作
	鉅 鹿 太 作	穎 川 駒 作	何 幸 五 郎
	陽 健 三	何 幸 五 郎	陸 市 十 郎
	穎 川 八 右 衛 門	鉅 鹿 太 作	穎 川 八 右 衛 門
		陸 市 十 郎	石 崎 鉄 助
		穎 川 八 右 衛 門	楊 熊 十 郎
		石 崎 鉄 助	
		林 道 三 郎	
		穎 川 熊 三 郎	
唐小通事末席		高 尾 泰 次 郎	
		呉 忠 三 郎	
	神 代 時 次	楊 熊 十 郎	穎 川 俊 三
	楊 熊 十 郎	陽 其 二	呉 雄 太 郎
	陽 其 二	穎 川 俊 三	河 副 作 十 郎

12) 游龍彦次郎の役職と席順については、『慶応元年 明細分限帳』に「文久三亥年小通事相続被仰付」という小通事任命の記録があるが、小通事過人第四位の席順で同分限帳に記されている。『元治元年 慶応三年改 諸役人分限帳』によると、慶応三年まで「小通事過人」として在籍している。游龍彦次郎が文久三年に「相続」の形で小通事に任命されたのは、恐らく父彦十郎が文久二年（1862）十月十七日に死去したことが原因であろう。また『訳司統譜』での記録は終始「游龍彦三郎」とあるが、「彦次郎」と改名したのも文久三年（1863）だと考えられる。宮田安『唐通事家系論考』「游龍彦十郎」、「游龍彦次郎」の条を参照、224-227頁。

幕末における長崎唐通事の体制（許）

	高尾宗三	呉雄太郎	蔡慎吾
	穎川俊三	河副作十郎	彭城秀十郎
	呉雄太郎	蔡慎吾	彭城鈞一郎
	穎川駒作	彭城秀十郎	盧篤三郎
	何伊代吉	彭城鈞一郎	太田伊豫四郎
	河副作十郎	盧篤三郎	
	石崎鉄三	太田伊豫四郎	
	林道三郎		
	穎川熊三郎		
唐稽古通事同見習	呉忠三郎	穎川永太郎	穎川永太郎
	森田哲十郎	蔡富次	蔡富次
	彭城太三郎	周庄平	周昌平
	彭城長之助	彭城友次郎	江政平
	早野麟太郎	江政平	呉宗平
	岩永範兵衛	呉宗平	神代太吉郎
	神代太吉郎	神代太吉郎	早野麟太郎
	盧篤三郎	早野麟太郎	林甚八郎
	蔡慎吾	林甚八郎	彭城郡太郎
	彭城藤十郎	彭城郡太郎	穎川新作
	王恒四郎	穎川新作	穎川弥十郎
	林甚八郎	穎川弥十郎	王勝太郎
	穎川新作	王勝太郎	穎川琮一郎
	柳屋美浦松	穎川琮一郎	東海重三郎
	周昌平	東海重三郎	彭城兵吾
	12名 (名前確認できず)	彭城兵吾	東海安助
		東海安助	李虎之助
		李虎之助	彭城太三郎
		森田哲十郎	岩永範兵衛
		彭城太三郎	王恒四郎
		岩永範兵衛	官梅三九郎
		王恒四郎	神代愛次郎
		柳屋美浦松	松尾治三郎
		穎川元次郎	吉島左十郎
		官梅三九郎	河野重次郎
		神代愛次郎	高尾栄次郎
		松尾治三郎	森田栄十郎
	穎川永太郎	吉島左十郎	彭城敬次郎
	彭城兵吾	河野重次郎	穎川豊太郎
	東海市三郎	高尾栄次郎	柳屋謙太郎
	穎川弥十郎		
	蔡富次		
	楊文次郎		
唐年行司	陳富太郎	陳富太郎	陳富太郎
	太田五郎助	太田五郎助	太田五郎助
唐年行司格見習	太田市太郎	太田重三郎	太田市太郎

内通事小頭筆頭	陳 幸 之 進	陳 幸 之 進	陳 幸 之 進
内通事小頭	江 政 平	楊 範 三	江 政 平
	楊 範 三	薛 信 次 郎	楊 範 三
	薛 信 次 郎		薛 信 次 郎
合計人数（本通事系／以外）	79（72／7）	79（73／6）	75（69／6）

以上の表から『訳詞統譜』の記録が終わっている文久元年以降の唐通事の動静が知られるであろう。

2、分限帳記録にみる長崎唐通事の体制

以上二種の分限帳記録に基づき、江戸時代の最末期である元治元年から慶応3年（1864～1867年）の唐通事の組織構成を復元する上、幕末という歴史的環境における長崎唐通事の体制とその性格を述べたい。

①長崎唐通事の体制の維持と調整

前述のように、長崎唐通事は一つの職能集団として江戸時代の最後まで存続し、幕末において安政2年（1855）4月24日に諸国方通事といわれる暹羅通事、東京通事、モフル通事がオランダ通詞の系列に編入された¹³⁾ こと以外に、慶応3年（1867）7月に長崎奉行所に改革が行われるまで唐通事の職制、規模に大きな変化が見られなかった。

具体的には、大・小・稽古通事が基本である本通事は元治元年（1864）に72人、慶応元年（1865）に73人、慶応3年（1867）に69人で、唐年行司、内通事いわゆる本通事以外の系列は7人、6人、6人の規模であった。各役職からみれば、まずは最高位の唐方諸立合大通事から大通事過人まで人員が一定しており、大通事も万治元年（1658）に4人と定数にして以来幕末に至ってその規模が維持されてきた。唯一の異動としては文久3年（1863）に大通事に上った¹⁴⁾ 呉泰蔵が慶応元年（1865）9月17日に死去した¹⁵⁾ ことにより、席順によって呉碩三郎が大通事過人から大通事に繰り上げられ、小通事の首位であった周恒十郎が大通事過人に上ったのである。小通事の部には、元治元年（1864）、慶応元年（1865）は分限帳在籍の4人と文久3年（1863）に「小通事相続」と命じられた游龍彦次郎と合わせて定数の5人に保っていたが、元治2年（＝慶応元年、1865）3月16日に游龍彦次郎の死去¹⁶⁾ によって実際に小通事の空席が生じた。しかし、『諸役人分限帳』慶応三年の記録には游龍彦次郎の名前が依然として小通事過人第四位に見られ、表向きには在籍するということである。一方、周恒十郎の異動により、小通事過人の首位にあった鄭右十郎が順次に繰り上げられたが、中間記録まで残っていた清河磯次郎の名前が最終記録に消されたため、1867年に実際に在任の小通事は石崎次郎太、東海哲次郎と鄭右十郎の3名しかいなかった。

小通事以下の各役職については、小通事過人は元治元年（1864）に6人・慶応元年（1865）に6人・

13) 『訳詞統譜』、百十四、百十七、百十八葉。

14) 『慶応元年 明細分限帳』、「呉泰蔵」条、148-149頁。

15) 『唐通事家系論考』、753頁。

16) 游龍彦次郎墓碑銘、『唐通事家系論考』、226頁。

慶応3年（1867）に5人¹⁷⁾、小通事助は4人・3人・8人、小通事並は4人・11人・6人、小通事末席は12人・10人・8人、稽古通事同見習は33人・30人・30人という統計が得られる。小通事助以下各職において、短年数で下位から上の職に抜擢する例が多く見られ、その調整が上層通事の部と比べて明らかに活発に行われていた。一方、安政以降唐船貿易の崩壊にもかかわらず、既存の制度と運営方式によって稽古通事クラスの人数が30名程度に維持されていた。ということは、唐船貿易という業務が中止となった後も、唐通事が既存体制を維持する姿勢が明らかである。

②唐通事新名門と有力通事の出現

幕末唐通事集団について、新しい名門の成立は注目すべき点である。すでに林陸朗に指摘されたとおり、慶応元年（1863）の時点で、大通事に在任している何隣三・李平三・中山太平治・呉泰蔵の四人全員が従来全く大通事を出した経歴のない家筋であって、これに対して、かつて大通事を多く輩出した名門通事家は廃絶したか低迷しているかの景観である。¹⁸⁾ さらに慶応三年の分限帳記録によると、呉泰蔵の死後に繰り上げられて大通事になった呉碩三郎は振浦系呉氏の出自であり、それまでは初めて大通事過人まで上った第七代呉藤次郎以外に、稽古通事か小通事末席、または小通事並に止まり、家格の高い家筋ではなかった。なお、呉碩三郎の生家栄宗系呉氏も第九代呉泰蔵の出世により家名が大いに上がった家系である。

なお元治、慶応より遡れば、安政年間にすでにその傾向が現れ始めていた。安政4年（1857）7月26日に大通事に昇任した鄭幹輔も、むしろ家格の低かった通事家の出である。安政5年（1858）に、陳清官系潁川氏の潁川潤助が大通事に上った。この陳清官系潁川氏は元内通事であって、潁川潤助の父仁十郎の代で本通事に転入した家系であるが、仁十郎が破格の出世を果たし大通事過人まで進んだことが潁川潤助の大通事昇任に大いに関係すると思われる。同じく安政5年に大通事の座に就いたもう一人は、陳冲一系潁川氏本家第八代潁川藤左衛門である。陳冲一系潁川氏本家は唐通事に屈指の名門であるのみならず、その分家である葉姓本古川町潁川氏の中に、葉茂通系潁川氏（冲一系潁川氏分家1）に潁川豊十郎が安政5年（1858）に諸立合大通事になり、葉良直系潁川氏（冲一系潁川氏分家2）に潁川四郎八が大通事に進んだ後さらに安政4年（1857）に唐通事頭取という最高位に上りつき、当時において大きな影響力を持つ通事家である。しかし、安政6年（1859）に潁川藤左衛門と潁川潤助が相次いで死去し、さらに万延元年（1860）に鄭幹輔が病死したことにより、大通事代替わりの時期が迎えられたのである。分限帳の職歴記録によると、大通事4人の昇進の年はそれぞれ何隣三・李平三が万延元年（1860）、中山太平治が文久元年（1861）、呉泰蔵が文久3年（1863）であり、呉碩三郎が最後に大通事に任命されたのは慶応元年（1865）以降であるということは、唐通事の新名門が安政年間に芽生え、万延以降に大通事クラスに全面的に進出し、これで潁川・彭城・林姓通事諸家による通事集団上層ポストの寡占が終了した。

一方、これら新しい名門を率いる有力通事の出現も注目すべきである。ここで鄭幹輔を典型的な存在として取り上げたい。鄭幹輔は宗明（二官）系鄭氏の出自である。鄭氏の初祖である鄭宗明は、海商鄭

17) 游龍彦次郎を小通事として計算。

18) 「長崎唐通事の職制と役株」、34-35頁。

芝龍の次男で、国姓爺鄭成功の弟として知られているが、鄭家の家格は決して高くはなく、第二代鄭茂左衛門以来稽古通事に止まることが多く、第四代の鄭敬左衛門と六代の鄭官十郎が小通事末席まで上っただけの家系であった。鄭幹輔は文政6年（1823）に稽古通事見習を以って唐通事の世界に入門し、¹⁹⁾ その後の経歴は「敏齋鄭先生遺徳碑」に、

受業於竹溪周老師²⁰⁾、聰慧出衆、年十五登仕、十七陞遷、時稱跨竈²¹⁾、考君喜、未幾卒。適周老師幫辦當年事因陞職卸事、薦先生補缺、遂為諸先輩及唐商所倚重、蓋乃職劇要務取時望云。二十七膺選入江戸昌平校、一任四年帰里、公暇授徒。先是娶某氏、苦多病不終、聚塾中、挙同僚吳氏泰蔵弟牛郎為嗣子、即永寧君也。先生甫踰不惑、乃列九家、尋陞大訳司、鄭氏至此始顯。嘉永末年、俄國遣使北蝦也、幕府備意、命唐譯司創譯滿洲語言、實先生啓之也。安政丁巳、清国髮匪之乱、采銅局墜業、崎地無復見唐船来。戊午春、幕府議准外国開横浜港、先生請于官、聘美国人瑪高温氏、倡率僚中子弟就学英语、時言者以爲異、先生愈激勸諸學生。未數年、業遽進、多為時用。故際明治中興、外交滋盛、邑之譯司前後輩出、得名於朝野之間者、多出於先生之賜也。²²⁾

とあるように、鄭幹輔は文政10年（1827）閏6月9日に小通事末席に上り、さらに業師周壯十郎の推薦を得て通事の要職に就き、先輩通事から来航唐人まで厚く信頼されていた。天保8年（1837）頃に昌平坂学問所の唐話教授に選ばれ、江戸に出向いたが、四年後に長崎に帰り、唐通事の業務を担当し、若輩通事や通事家子弟の指導も兼ねていた。天保15年（1844）11月19日に小通事に昇任²³⁾、嘉永4年（1851）12月28日に大通事助、さらに安政3年（1856）4月15日に大通事過人に進み、翌安政4年（1857）7月26日に大通事に上った²⁴⁾。「訳司九家」に身を置く鄭幹輔は、唐通事の満州語研究事業を担当し、なお、英語兼修を積極的に提唱し、安政6年（1859）一月に自ら游龍彦三郎、彭城大次郎、大田源三郎、何礼之助、平井義十郎らを率いて、長崎に停泊中のアメリカ船に赴き、宣教師で医士であるマゴオン（Macgowan, D. John、瑪高温）に英語を教わったこと²⁵⁾が高く評価されている。また鄭幹輔は養子右十郎のほか、門下生に平井希昌、吳来安、潁川君平、何幸五、高尾恭治、神代延長、盧高朗、平野祐之、鉅鹿篤義、柳谷謙太郎、彭城昌実、清川磯次郎、吳栄正、薛信二、早野貞明、潁川永太郎、游龍鷹作、岩永範兵衛、河副作十郎、彭城種弘、周昌平²⁶⁾がいた。若輩通事を指導することで、多くの下層通事に影響を及ぼすことも考えられる。

鄭幹輔の死後、養子鄭右十郎（後の永寧）が家業を継ぎ、万延元年（1860）に小通事過人に昇進し、

19) 『訳司統譜』、九〇葉。

20) 周辰官を祖とする周氏七代の周壯十郎（先名恒十郎）のこと。

21) 「跨竈」というのは、子が父に勝ることの喩えである。鄭幹輔が十七歳の年で小通事末席になって、父官十郎と同じく小通事末席に在任することを指している。

22) 宮田安『長崎崇福寺論考』（長崎文献社、1975年）399-400頁。

23) 『訳司統譜』、二九-三〇葉。

24) 『訳司統譜』、一九葉。

25) 「正月二十三日長崎奉行達書 支配向へ 英語稽古の件」（東京大学日本史料編纂所『大日本古文書 幕末外国関係文書』之二十二、1939年）104-105頁。古賀十二郎「米人Dr. D. J. Macgowanの渡来 附唐通事の英語研究」（『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、九州書房、1947年）73-78頁。

26) 「敏齋鄭先生遺徳碑」による。

元治元年の分限帳記録ではすでに小通事過人の首位に列せられ、やがて呉泰蔵の死去により席順繰上で小通事に上り、鄭氏が「訳司九家」という中心地位を確実に確保した。一方、栄宗系呉氏からすると、第九代の中には、呉泰蔵が文久三年から慶応元年まで大通事に在任し、彼の死後、養子に出された呉碩三郎が大通事に昇格し、実際にそのポストを引き継いだ。それと同時に、実弟である鄭右十郎も鄭家を継ぎ、小通事になり、つまり元治・慶応年間において、同じ栄宗系呉氏出自の兄弟三人が前後して大通事・小通事の3席を獲得したわけである。そのほかに、呉泰蔵の弟で呉碩三郎と鄭右十郎の実兄和三郎が唐通事高尾家の養子となり、万延元年（1860）にすでに小通事過人に任じたのである²⁷⁾。文久元年に急病で死去したが、もし生き続けたら小通事に上る可能性もなくはない。江戸時代の最末期において頭角を現し始めた呉碩三郎と鄭右十郎は、明治以降外務省に登用されて、近代の中日交渉に大いに活躍していた。それも彼ら二人の唐通事における地位と影響力と大いに関係すると推察できる。

③人員移動による離脱

こうして既存体制の維持を前提に唐通事組織内で調整が行われ、新しい名門と有力通事が出現していた。一方、中堅階層の唐通事が特別人事で通事組織を離脱する例が現れた。ここでまず『慶応元年 明細分限帳』の「太田伊予四郎」条の記録を通じて、幕末という歴史的環境の一端を窺ってみたい。

元文二巳年玄祖父より六代当丑年迄百二十九年相勤、父源三郎儀江戸表二而文久三亥年小通事末席より神奈川奉行支配定役格御抱替被仰付、伊予四郎儀安政六未年稽古通事見習、文久二戌年稽古通事、元治元子年新規稽古通事御抱入、同年小通事末席被仰付、当丑年迄都合七年相勤。

とあるように、太田伊予四郎の通事歴が二段に分けられる。最初は実兄源三郎の養子として安政6年（1859）に稽古通事見習に任じられ、文久2年（1862）に稽古通事まで進んだが、次の段階では元治元年に「新規稽古通事」になった同年小通事末席の任命を受けた。その二段階の転換点は太田源三郎が文久三年に「神奈川奉行支配定役格」に抜擢されたことである。何ゆえ小通事末席在任中の太田源三郎に江戸で「神奈川奉行支配定役格」に抜擢されたかということ、太田源三郎は唐通事の中で最初に英語学習に取り組む5人の1人であり、幕末の開港地の外交・貿易において得難い人材であって登用されたわけである。このように語学と対外交渉従事の経験を見込まれ、支配定役格に抜擢された唐通事は太田源三郎だけではなく、かつてともに英語を教わった小通事過人平井義十郎、何礼之助も文久三年七月六日に特別人事で「長崎奉行支配定役格」に任命されたのである。²⁸⁾ 但し、太田源三郎に実弟の伊予四郎が跡取りとしてすでに稽古通事に在任し、自分が唐通事から離脱した後に「新規」の形を以って太田家役株の保留を叶えられたと違って、平井義十郎、何礼之助は当時唐通事組織内に後継者不在が原因で、平井、海庵系何氏両通事家の役株が彼らの代で断絶することになった。

太田源三郎、平井義十郎、何礼之助三人の移動からすると、中堅で有能者である通事が幕臣に抜擢さ

27) 『訳司統譜』、三二葉。

28) 「常々家業兼英語兼学格別出精、是迄御用筋正実二相勤候二付、出格之訳ヲ以テ長崎奉行支配定役格申付勤候内、新規御宛行三拾俵三人扶持役、扶持役金三十五両被下之。」「(平井希昌) 履歴書」(『平井希昌(義十郎) 林道三郎 橋本雄造ほか履歴および伝記』、長崎歴史文化博物館福田文庫、資料番号：福田13-172)、「公私日録」2(『何礼之文書』1、東京大学社会科学研究所資料室、フィルム番号：586)。

れ、唐通事組織から離脱したのは、安政以降日本の外部環境が大きく変わっていく中、開港地ではそれまで以上の対外交渉支持が求められていたからである。このような環境の中で、特に唐船貿易を中心とする業務が消失した後、唐通事がより幅広く対外交渉に進出し、通訳・翻訳、外交顧問的機能が大いに要望された。

なお、幕末になって唐通事集団も全く閉鎖的体制でなくなっていた。このような人員移動はまさに後の近世・近代移行期における唐通事出身者の移動の前触れである。

二、唐通事体制の終結

1、唐通事体制の終点

これまでは、1868年に徳川幕府の長崎支配が終了することに伴って長崎唐通事の組織が消滅したとされている。しかし、長崎唐通事が何時消失したかについて、簡単に解明できる問題ではない。

以上に取り上げた分限帳によると、慶応3年（1867）に分限記録が修訂された時点で、二百六十余年前から続いた長崎唐通事の組織が存在し、慶応2年か3年に最後の体制内調整が行われたわけである。

しかし、慶応3年（1867）7月、長崎奉行所で地役人を対象とする制度改革が行われた。七月七日に改革が始動し、「両通事、乙名、会所役両組」の五役の人員が呼び出され、唐通事は頼川豊十郎、薛眞右衛門、頼川彦五郎、何憐三、李平三、中山継二郎、周恒十郎、東海哲二郎、彭城大次郎、吉嶋栄之介、頼川八右衛門、頼川仁兵衛ら唐通事が奉行所に召出れた。²⁹⁾ この改革の結果のとして、「是迄病氣□□致居名前其俣ニ而有之者不殘退役ト」の指示がくだされ、まず地役人の範囲内の冗員、また死後の表向きの在任などはすべて整理されたのである。このような人員削減のほか、唐通事にとっては職制そのものも改変し、体制の根本から動揺された。これに対し、同7月に唐通事が身分について以下の意見を上申した。

私共訳司順序之儀、外役々□茂違候間、地役之順序御除、礼式等之節別席ニ罷出候様相心得申可旨被仰渡奉畏候、然ル処私共役儀ハ地役尋常之職と外国通訳之任と輕重有之關係不均、都而御国務重大之事件翻訳通弁相勤候儀ニ有之候得共、地下御政務方或ハ財用之會計等を掌り候、職事□□格別之儀ニ而従前之制外に蒙御優待来候得共、今般役々之身分御引直し御定相成候付、私共儀茂席位判然不仕候而ハ時ニ□不都合之次第茂可有之奉存候。³⁰⁾

この文面から窺えると、唐通事は自分が従来長崎奉行配下の地役人の一環でありながらも、従来外国関係の実務を担当し、対外交渉において重要な役割を果たしてきたため、ほかの地役系統の職と比べてはるかに重視されており、特別に優遇されていた。しかし、改革で地役諸役の改称、合併、再編成によって、唐通事固有の体制が破壊され、組織の独立性と優越性を失うようになった。

さらに林道三郎の履歴によると、彼は「改革ノ節、家禄五人扶持手当金七拾五両ニ而長崎奉行支配三

29)「公私日録」4（「何礼之文書」1、東京大学社会科学研究所資料室、フィルム番号：586）。

30)「訳司順序之儀ニ付奉伺口上覚」（長崎歴史文化博物館渡辺文庫、資料番号：へ14 173）。

等通事ニ」³¹⁾ 任命された。その職名からは、①唐通事とオランダ通詞を合併し、共に長崎奉行支配通事に配属する、②大・小・稽古通事を基本とする近世唐通事の職制を一等・二等・三等（・四等）の構成に変わると言う二点の基本状況が推察される。これで唐通事集団が唐船貿易をはじめとする業務を独占する立場を完全に失い、組織内の人事権も長崎奉行に返上せざるを得なくなったのである。以上の情報をまとめると、慶応3年7月の改革は長崎唐通事の既存体制の終点となったであろう。

2、明治元年『長崎府職員録』にみる旧唐通事

慶応3年の長崎地役人改革のおよそ半年後、慶応4年1月15日（1868年2月8日）に長崎奉行河津祐邦が長崎から脱出し、徳川幕府の長崎支配が終了した。これで近世・近代移行期に入り、旧長崎唐通事を含む行政組織が新たな体制に編入されたが、慶応3年7月改革で改定された新職制が長崎府の初期に大いに継承されたとされるため、ここで明治初期長崎に奉職する旧唐通事を幕末の唐通事の延長線として取り上げておこう。

明治元年（1868）の『長崎府職員録』³²⁾ に注目すると、明治維新直後に多くの唐通事出身者が長崎府職員に採用された。

表二

所 属	職 名	人 物	備 考
外国管事役所掛	諸司長（1名）	平井義十郎	文久三年七月、長崎奉行支配定役（三十俵三人扶持役金三十五両、別途手当金一ヶ年五十両）に抜擢 ³³⁾
	取締助役（1名）	額川保三郎	元唐小通事過人
	通辨役頭取（全2名）	石崎次郎太	元唐小通事
	通辨役頭取助（全4名）	平野栄三郎	元唐小通事過人
		額川熊三郎	元唐小通事助
	上等通辨役（全12名）	何幸五郎	元唐小通事並
		鉦鹿太作	元唐小通事並
		陽其二	元唐小通事並
		額川栄太郎	= 額川永太郎？元唐稽古通事同見習
		柳屋謙太郎	元唐稽古通事同見習
		早野麟太郎	元唐稽古通事同見習
		中山太郎	
	中等通辨役（全6名）	河副作十郎	元唐小通事末席
		彭城鈞一郎	元唐小通事末席
		呉宗平	元唐稽古通事同見習
		薛信次郎	
		河野重次郎	元唐稽古通事同見習
		江政平	元唐稽古通事同見習
	下等通辨役（全3名）	彭城邦太郎	= 彭城郡太郎、唐稽古通事同見習

31) 林陸朗『長崎唐通事——大通事林道栄とその周辺——』[増補版]（長崎文献社、2010年）265頁。

32) 明治元年『長崎府職員録』（長崎歴史文化博物館所蔵、資料番号14 49-1）。

33) 『平井希昌（義十郎） 林道三郎 橋本雄造ほか履歴および伝記』。

広 運 館	見習（全3名）	陳 太 平	元唐稽古通事同見習
		東 海 重 三 郎	元唐稽古通事同見習
	佛学助教（1）	呉 常 十 郎	
	翻訳方（全2名）	呉 碩 三 郎	元唐大通事
		鄭 右 十 郎	元唐小通事
御 船 手 掛	通辨役頭取助（全2名）	蔡 善 助	元唐小通事過人
	上等（通辨役）（全10名）	盧 篤 三 郎	元唐小通事末席
		清 河 磯 次 郎	元唐小通事〔慶応元年〕
		彭 城 秀 十 郎	元唐小通事末席
		神 代 時 次	元唐小通事助
		游 龍 鷹 作	唐小通事過人游龍彦次郎の子 ³⁴⁾
	中等（全6名）	太田伊予四郎	元唐小通事末席
		石 崎 鉄 三	
		穎 川 文 次 郎	
		林 甚 八 郎	元唐稽古通事同見習
	下等（全11名）	岩 永 範 兵 衛	元唐稽古通事同見習
		王 恒 四 郎	元唐稽古通事同見習
		陳 幸 之 進	内通事小頭筆頭
		彭 城 兵 吾	元唐稽古通事同見習
	通辨稽古（全34名）	王 勝 太 郎	元唐稽古通事同見習
		神 代 太 吉 郎	元唐稽古通事同見習
		穎 川 新 作	元唐稽古通事同見習
		穎 川 源 三 郎	
		穎 川 豊 太 郎	元唐稽古通事同見習
		陸 利 喜 馬	
		太 田 晃 四 郎	
		東 海 安 助	元唐稽古通事同見習
		李 寅 之 助	= 李虎之助、元唐稽古通事同見習
		神 代 愛 次 郎	元唐稽古通事同見習
		松 尾 治 三 郎	元唐稽古通事同見習
		吉 島 左 十 郎	元唐稽古通事同見習
		高 尾 栄 次 郎	元唐稽古通事同見習
		森 田 栄 十 郎	元唐稽古通事同見習
		薛 種 三 郎	
		周 壮 十 郎	
		楊 龍 太 郎	
		官 梅 千 代 松	
		彭 城 彦 太 郎	
		鄭 吉 太 郎	
中 山 繁 松			
彭 城 亀 之 助			
穎 川 善 吉			
穎 川 平 三 郎			

34) 宮田安『唐通事家系論考』、227-228頁。

以上表二に示したように、明治元年（1868）『長崎府職員録』に在籍する者の中、確実に唐通事出身者である者が44名おり、そのほかに、外国管事役所掛の上等通辨役中山太郎、中等通辨役薛信次郎、広運館の仏学助教呉常十郎、御船手掛の中等通辨役石崎鉄三、瀬川文次郎、通辨稽古瀬川源三郎、太田晃四郎、陸利喜馬、薛種三郎、周壮十郎、楊龍太郎、官梅千代松、彭城彦太郎、鄭吉太郎、中山繁松、彭城亀之助、瀬川善吉、瀬川平三郎の18人の場合、出身や職歴の記録に通事経歴をはっきりと確認できないが、元唐通事かまたは通事家子弟である可能性がある。とすると、明治元年の長崎府職員に在任する長崎唐通事系統の者が62名あり、この人数に太田源三郎、何礼之助、林道三郎ら離脱・退職した旧唐通事、慶応3年の改革で名を取り上げられた瀬川豊十郎、薛眞右衛門、瀬川彦五郎、何憐三、李平三ら「老通事」を加算すると、その人数は元治・慶応年間の唐通事規模とほぼ同様である。通辨職に唐通事出身者が占める割合については、司長、取締助役、通辨役頭取・助の職を除いて、上・中・下・見習／稽古の四段85席に、唐通事出自の者は53名となり、6割以上という割合になる。

この明治元年『長崎府職員録』が作成された時点で、幕末の長崎唐通事のほぼ全体が維新直後の長崎地方の行政機関に移入されたが、やがて鄭右十郎、呉碩三郎、瀬川保三郎、平井義十郎らが東京に出向いて明治新政府に登用され、何幸五郎、盧篤三郎らが横浜、神戸・大阪に移り、近代の新しい体制で各機関に職を奉ずるようになった。この意味では、明治元年の『長崎府職員録』は近世から近代にかけて長崎唐通事の最後の存在形態を示している。

おわりに

上述のように幕末明治期における長崎唐通事の変容の視角から、幕末における長崎唐通事の体制を考察してきた。特に文久元年（1861）十月十六日までの記録しか残されていない『訳司統譜』を補い、幕末の長崎地役人の全体記録『元治元年 慶応三年改 諸役人分限帳』、『慶応元年 明細分限帳』の二種の記録から、江戸時代最末期である元治、慶応年間（1864～1867）の唐通事体制の復元を試みた。この三年のデータによると、この時期の唐通事の職制、規模に大きな変化が見られず、従来の組織構成と運営基準によって体制が維持されていたことがわかる。

この時期において、かつて家格の低い唐通事家から大通事を出し、新しい名門成立の傾向が安政4年（1857）頃に芽生え、万延・文久年間（1860～1863）に顕著に現れていた。新名門の成立に伴い、鄭幹輔を代表とする有力通事が出現し、幕末唐通事の展開に大きな役割を果たしてきた。さらに榮宗系呉氏一門のように、呉泰蔵、呉碩三郎と鄭永寧兄弟で大通事・小通事の席を多く占めるという現象が見られる。

さらに、太田源三郎、平井義十郎、何礼之助が幕臣に抜擢され、唐通事組織から離脱したように、幕末において唐通事がより幅広く対外交渉に進出し、通訳・翻訳、外交顧問という分野で活躍するという新状況が見られた。

このように慶応3年（1867）まで存続してきた長崎唐通事の体制が、同年7月に長崎地役人を対象とする改革で改変された。改革後の新職制が後に長崎府の初期に大いに継承され、明治元年『長崎府職員録』によって、幕末の長崎唐通事のほぼ全員が維新直後の長崎地方の行政機関に移籍されたのである。このことは長崎唐通事の力量が即戦力として評価されたことになる。彼等の力量とは江戸時代を通じて

対中国との通商関係に限定されるものの対外関係に関与してきた業務能力の一環として培われ準備されてきたものであった。そしてそれらは、その後に明治新政府が展開した国際外交交渉の舞台で発揮されることになったのである。